

第9章 ライフスタイル — 自然・環境、居住、余暇 —

以上、第2章から第8章まで、基本的な生活における意識を概観したが、実際の政策という視点からは、このような基底意識よりもさらに具体的な、生活様式・ライフスタイルにかかわる意見や意識についての検討も欠かすことはできない。

こうした意識は、より社会状況による影響が大きかったり、個別具体的で日本人の意識として統一的でなかったりと、時系列的な世論調査ではとらえにくい分野であるけれども、ここまでの手法や結論などを用いて、特に社会資本整備との関連性の高い、自然・環境、住宅、余暇という3つの点について考察を試みることにしたい。

9.1 自然・環境

(1) 自然と人間

国民性調査で、次のような設問がある。

○自然と人間との関係について、つぎのような意見があります。あなたがこのうち真実に近い（ほんとうのことに近い）と思うものを、1つだけ選んでください？

- ・人間が幸福になるためには、自然に従わなければならない
- ・人間が幸福になるためには、自然を利用しなければならない
- ・人間が幸福になるためには、自然を征服してゆかねばならない

1953年から88年までの推移を見ると、68年と73年の間でかなりの変化が見られ、「自然に従え」と「自然を征服」が逆転している。これは、公害問題などの影響であろうが、世代差なく変化が起こったもので、その後も「自然に従え」は着実に増加し、88年には「自然を利用」と肩を並べるところまで来ている（図9-1、9-2）。

図9-1 自然と人間

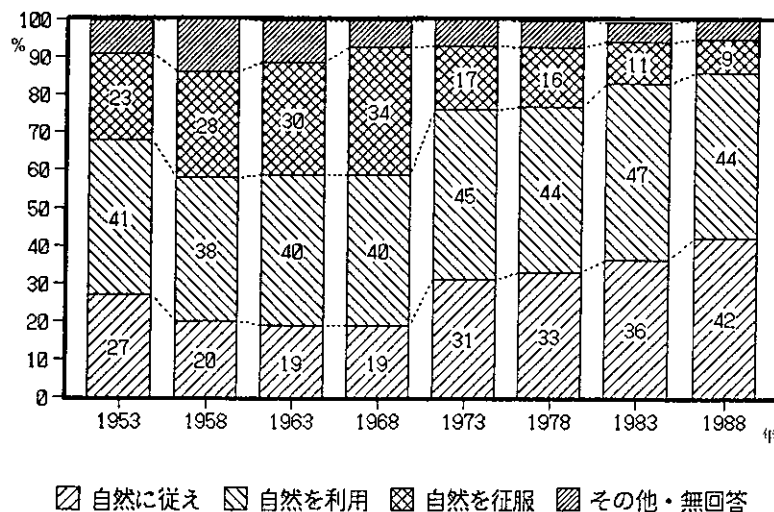
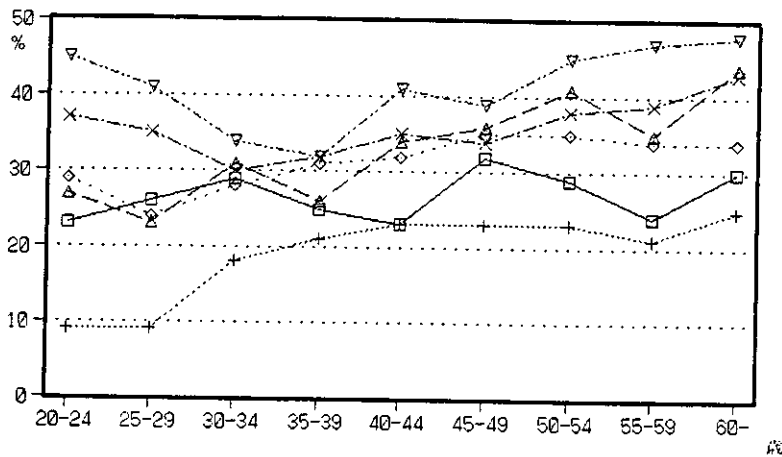


図9-2 自然と人間：「自然に従え」（時点別、年齢別）



調査年： □ 1953 + 1963 ◇ 1973 △ 1978 × 1983 ▽ 1988

(2) 自然保護と観光開発

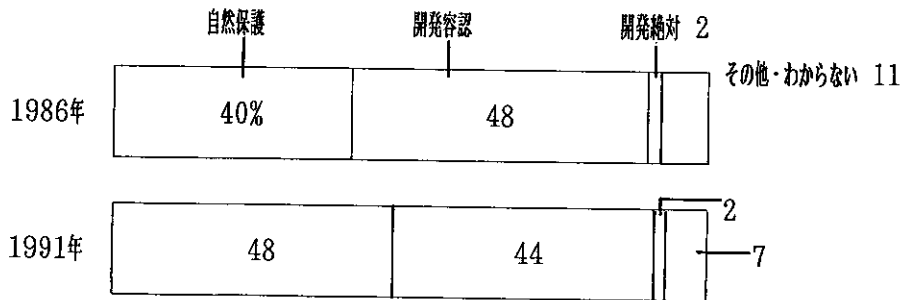
総理府「自然の保護と利用に関する世論調査」でも最近の傾向を見ることができる。

○自然公園内に自動車道路やホテル、スキー場などの観光施設をつくることは、利用者が便利になる反面、自然環境を損なうことも考えられます。自然保護と観光開発との関係について、あなたはどのように考えますか。注)下線部は86年調査では1にブア化となっている。

- ・自然を守るためには、これ以上観光開発をすべきではない (自然保護)
- ・ある程度の観光開発も図るべきだ (開発容認)
- ・自然保護よりも観光開発を図るべきだ (開発絶対)

1986年から91年への変化は、上と同様の自然志向を示している(図9-3)。

図9-3 自然保護と観光開発



意識のレベルでは、いわゆる自然志向、環境重視志向は各年齢層で支持されるようになっており、今後もより若い世代が流入するにつれて、意識はさらに定着していくものだろう。そうなると、問題となるのは、この意識が、どのように実際の生活に結びつくものなのか、であろう。

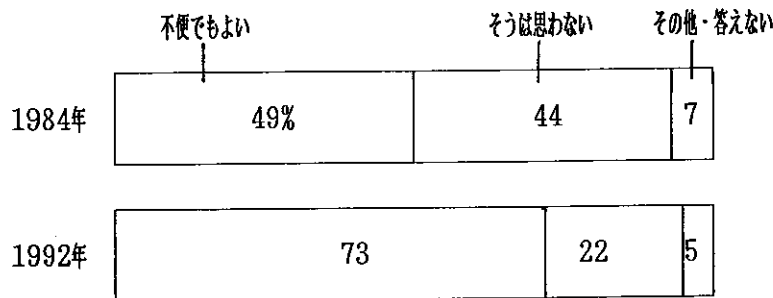
(3) 環境と生活

朝日新聞社の世論調査には、自然環境と生活とに関する設問がある。

○あなたは、自然環境を守るためには、生活が少しくらい不便になってもよいと思いますか。そうは思いませんか。
・不便でもよい ・そうは思わない

これを見ると、「不便でもよい」という割合が、かなり大きくなってきている（図9-4）。

図9-4 環境と生活



しかしながら、こういった観念的な自然志向が、将来実際に生活レベルの低下につながった場合の関連性は、こういった世論調査からは読み取りにくい部分である。

本章ではこうした読み取りにくい面については判断を避け、有識者への聴き取りから得られた、意識についての将来像や政策との関連についての意見を提示して、それぞれの検討をしめくくることにしよう。

(有識者意見)

- ・社会的な不安感から環境重視は日本人の基本的意識となっているが、これは豊かさ、ある意味でのぜいたくさを求めるもので、資源節約につながるというものではない。
- ・環境問題は基本的には多くの人に合意されていることから、これが政治の敵になるか味方になるかは微妙な要因である。
- ・具体的な生活にかかわる問題が起きなければ、環境意識は強まらないであろう。
- ・環境は、欧米のように、日常生活に影響を与え、格好がよいものとして認識されるであろう。
- ・環境に関しては、組織でも個人でも言行一致は守られない。生活の利便性向上と資源の節約とは両立しないものである。
- ・環境に関する意識は変わりつつあるが、日本では地域での自給の姿が日常生活で見えないせいか、行動にあらわれない。

9.2 住宅

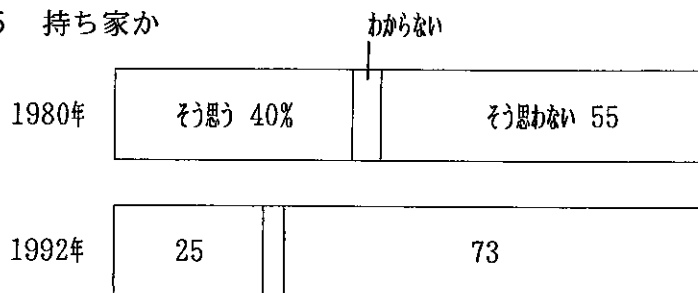
住まい方に関する意識は、住生活に対する注目度の高さもあり、さまざまな議論の俎上にのぼる。こうした意識としては、やはり「根強い一戸建志向」というような、「住宅を所有するか賃貸か」という軸と、「一戸建か中高層か」という軸での問題であり、また住宅に関する状況を考えると、首都圏など大都市圏での動向が注目されるであろう。

(1) 住宅に関する意識

東京都「都市生活に関する世論調査」により、時系列での東京都でのこのような住居観についての各種の意識の変化を見ることができる。

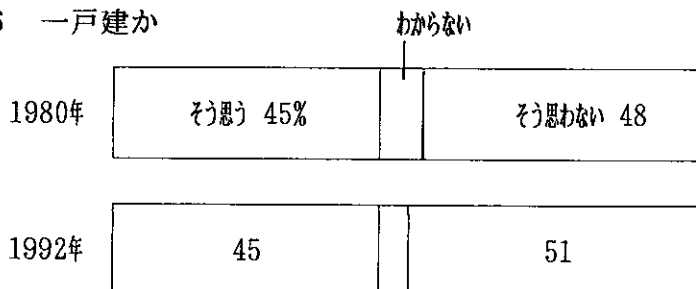
○自分の家を持つてはじめて一人前といえる

図9-5 持ち家か



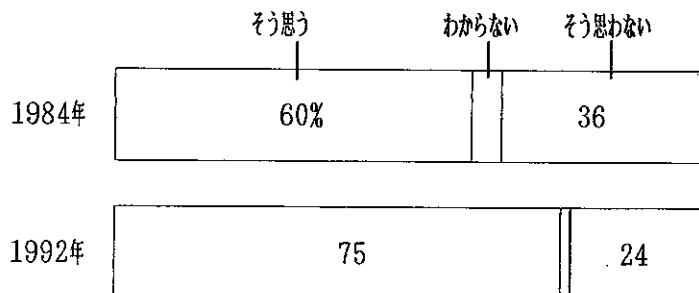
○大都市の住宅としては、一戸建よりも中高層住宅がふさわしい

図9-6 一戸建か



○多額の借金までしてマイホームを持ちたいとは思わない

図9-7 借金しても持ち家か



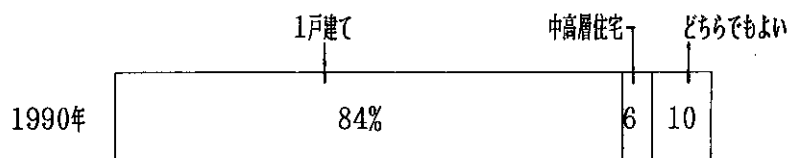
(2) 住宅に関する意識

また、経年的な比較ではないが、総理府「大都市の住宅・宅地に関する世論調査」により、住宅に対する考え方を見るとつぎのようになる。

注) 首都圏・京阪神圏に居住する世帯(世帯員2人以上)の20歳以上のものが対象である。

○あなたにとって望ましい住宅の形態は1戸建てですか、それとも中高層住宅ですか。

図9-8 一戸建か



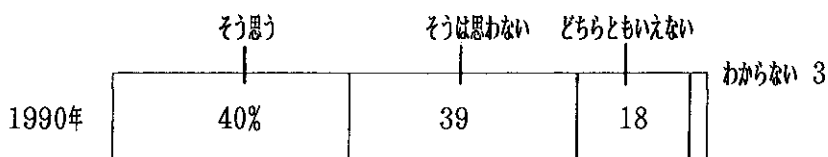
○長時間にわたって高額住宅ローンなどを背負うことになってでも、持家の方がよい

図9-9 持ち家か



○通勤時間がかかるなど日常生活が多少不便でも、持家の方がよい

図9-10 不便でも持ち家か



これらのものからは、近年の地価高騰の影響か、住宅の所有に対する意識はやや変化し、住宅を所有することに関しては「持ち家志向」は強いものの、状況によってはこだわらない姿勢が出てきている。また、「一戸建か中高層か」という軸では、設問にもよるが、特に「一戸建」が優勢であるわけでもないようである。

こういった住むことに関する意識は、金銭的なものなど外的条件に大きく左右されるため、こういった「志向」を、第2章から第8章までの基底意識と関連させるなどして、意識の面だけから理解することは難しく、「一戸建持ち家志向」の将来像は、今後の方向として定まったものが見えず、地価など社会的条件により居住は、止むを得ず選択させられている面が強く、居住者の意識の影響は強くないものと考えられる。

(有識者意見)

- ・一戸建志向はあるかもしれないが、それよりも住みたいところに住むことができるかどうかという問題である。
- ・データ上持ち家志向が減っていてもそれは諦めただけで、本音は持ち家志向である。
- ・子供のころから住んでいれば、集合住宅への抵抗はないだろう。
- ・住居については、住めるところに住むしかないという、実態上の問題である。
- ・土地にこだわりが強いのは、農村社会時代からの歴史的な、日照欲求のためである。しかし、都会で太陽を求めるのは無理である。

9.3 余暇

レジャーや余暇生活に対する関心は高く、今後は時短が進むことにより、さらに余暇の動向は注目されるところである。

(1) 余暇時間への欲求度

総理府「余暇と旅行に関する世論調査」では、余暇時間への欲求は、安定して高いものとなっている(図9-11)。

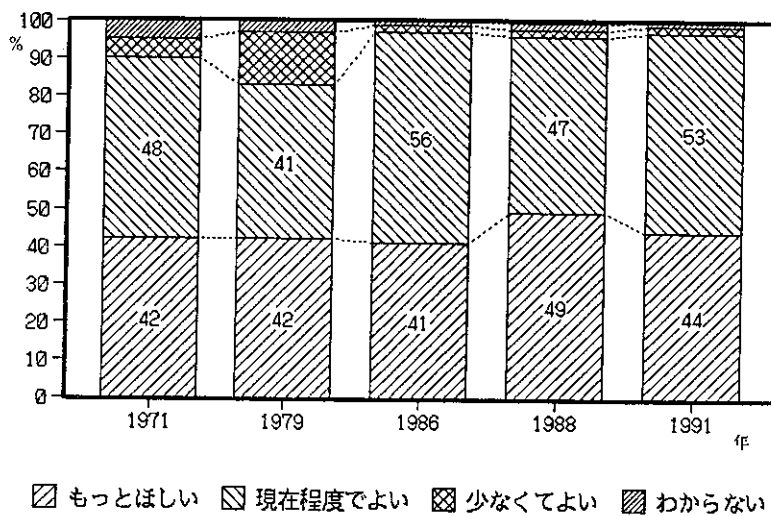
○あなたは、余暇時間(自由時間)をもっとほしいと思いますか、現在程度でよいと思いますか、それとも現在より少なくてよいと思いますか。

・もっとほしい ・現在程度でよい ・現在より少なくてよい ・わからない

注1)1971年は有職者、無職の主婦、学生が対象となっている。

2)79年は「現在より少なくてよい」が「そうは思わない」となっている。他にも71、76年調査には、多少語句の異なるところがある。

図9-11 余暇時間をもっとほしいか



(2) 余暇の過ごし方

また、日本人の意識調査では、余暇の過ごし方について、現状と将来について聞いた設問がある。

○余暇についてですが、現在あなたはどんなことをして、自分の自由になる時間を過ごしていることが多いですか。

○将来はどんなことをして、自由になる時間を過ごしたいとお考えですか。

- ・好きなことをして楽しむ
- ・運動をして、体をきたえる
- ・友人や家族との結びつきを深める
- ・体をやすめて、あすに備える
- ・知識を身につけたり、心をゆたかにする
- ・世の中のためになる活動をする

図9-12 余暇の過ごし方（現在）

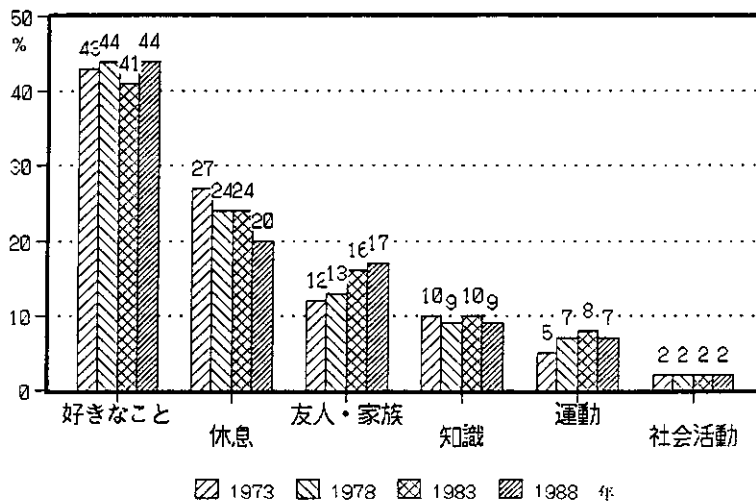
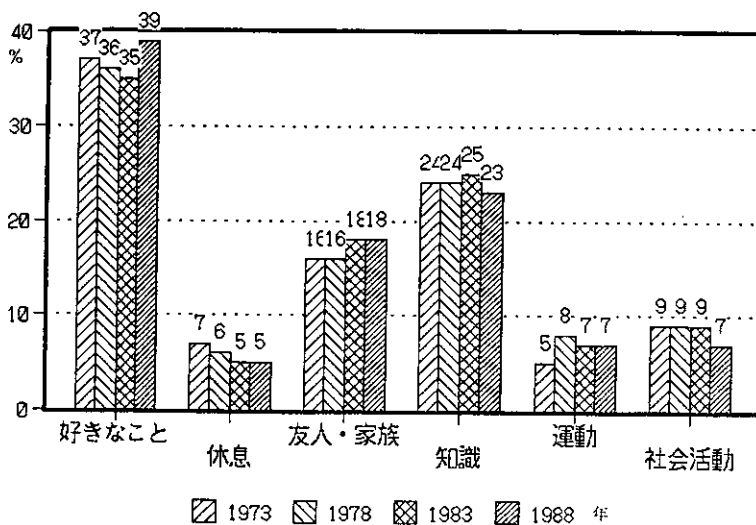
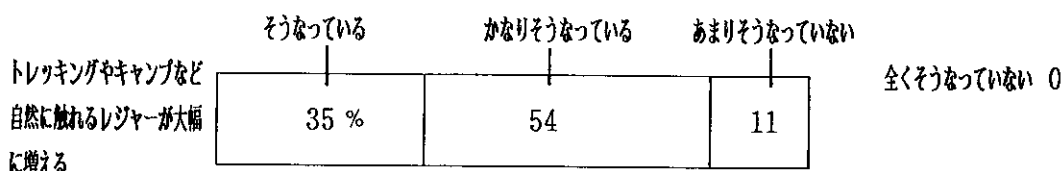


図9-13 余暇の過ごし方（将来）



余暇の重視自体は、これまでの個人志向や仕事に関する意識の動向からも、当然のことと言える。内容自体については、1973年からみてもそれほど大きな変化はないが、積極的な余暇への傾向が多少見受けられる（図9-12, 9-13）。また、有識者の意見では、上で述べたような自然志向と通じたような余暇になる可能性が指摘されている。時短や設備面の条件によっては、「2025年の社会展望アンケート」でも予測されている通り（図9-14）、自然型レジャーが広まるかもしれない。

図9-14 自然に触れるレジャー（「2025年の社会展望アンケート」より）



（有識者意見）

- ・時間の余裕があれば余暇を考える。その際は、自然志向が前面に出る可能性がある。
- ・金と暇に影響されるもので、余暇に対する姿勢そのものは不明である。
- ・時間の余裕があれば余暇に向かう、という程度の問題である。
- ・余暇の過ごし方としては、自然体験、廉価、クラブ型、という優先順位である。